

ウメイロー一本釣漁業視察

水産業改良普及員 伊禮勇雄

1. 目的

八重山地域の沿岸漁業のなかで一本釣漁業は大きなウエイトを占め、ここ近年、1トン未満から3トン型へと漁船規模も増えつつあり、漁場の遠離に伴い、無線電話等も設置された。

当地域の一本釣漁業は主にハマダイ（アカマチ）、アオダイ（ヒチュウマチ）、フエダイ等を対象として周年操業が行なわれている。しかしながら、限られたソネ資源であるため同一漁場内における競合が激しいために、資源的減少が見られるようになった。そのために新たな一本釣漁業の対象となる魚種に適した漁具、漁法等の導入を図るため、本県沿岸にせい息している「ウメイロ」（グルクンマチ）魚種を対象として、ウメイロー一本釣漁業の盛んな高知県で視察研修を受けたのでその概要を報告します。

2. 研修地及び期間

高知県土佐清水漁協

昭和52年9月26日～10月1日

3. 研修者

八重山漁協、金城正松、高江洲正光、大浜長弘

技師（水産業改良普及員）伊禮勇雄

4. 漁法

漁場に着くと、船尾のほうから釣糸を投入し、釣感があれば船首にそってつきつきと釣糸を投じていく一本釣漁業である。

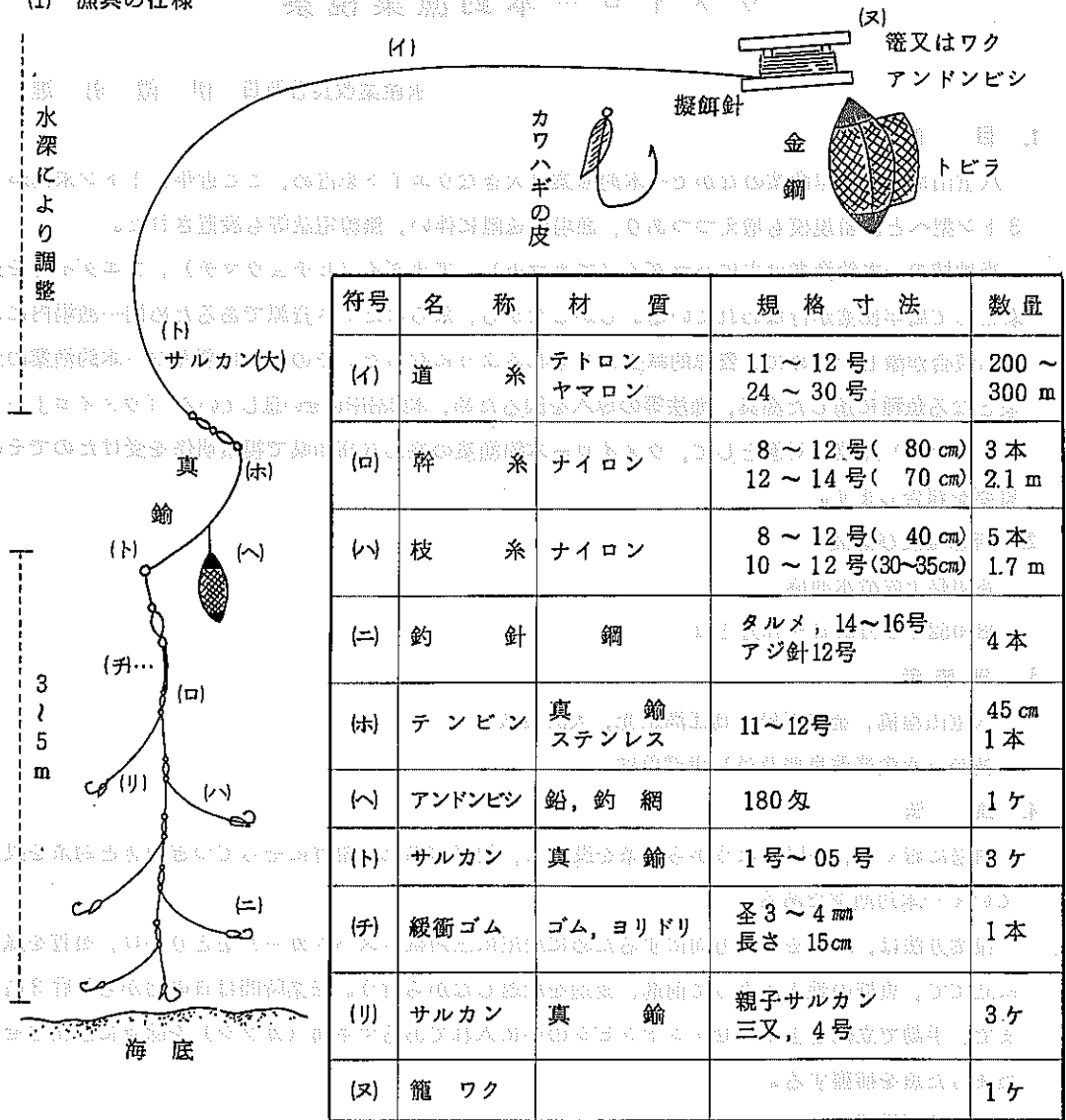
操業方法は、船体を一定方向にするために船尾に三角帆（スパンカー）をとりつけ、船首を風上に立てて、魚群の動きによって前進、後進を繰返しながら行う。操業時間は日の出から午後3時頃まで、手動で立縄を上下させアンドンビシの中に入れてあるマキ餌（カブシ）を除々に放出させ、集まった魚を捕獲する。

5. 漁具及び構成

天びんに「アンドンビシ」を下げ、まき餌（カブシ）を入れて行う漁法であり、アンドンビシはオモリの役目となる。

本県でも一本釣にマキ餌を利用したハンカチ釣とって従来から行なわれているが、ウメイロ（グルクンマチ）を対象とした漁法ではなかった。

(1) 漁具の仕様



(2) 漁船規模

漁船は6~7トンで5~8人乗組み、手ぐり操業を行なっている。土佐清水漁協では10~30隻の漁船によって定期的に操業されている。

(3) 漁期及び漁場

漁期は5~6月頃で、漁場は足摺岬南西5~20マイル、水深100~150メートル沖の岩礁地帯が主漁場である。

以上、新漁具について報告しましたが、ウメイロを対象とした漁具の導入だけでなく、タカサゴ(ヒラグルクン)等も対象とした導入も可能であるとのことで、グループの活動課題として検討し、漁具の導入及び改善に務めたい。